

翻譯・訳注

訓讀説文解字注（十八）

森 賀 一 恵

富山大学人文科学研究第 84 号抜刷

2026年3月

訓讀說文解字注（十八）

森 賀 一 恵

「訓讀說文解字注（十七）」に續いて、段玉裁『說文解字注』を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀說文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に1) 2) 3)等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇下它部～卵部は『繫傳』では缺けている卷二十五に含まれるが、祁刻本に大徐本との異同があれば記す。

十三篇下

（它部）

8b

𧈧，虫也，从虫而長，象冤曲𧈧尾形^(一)，上古艸尻患它，故相問無它乎^(二)，凡它之屬皆从它，𧈧，它或从虫^(三)，

它，虫也，虫に从ひて長し，冤曲し尾を𧈧るる形に象る，上古は艸尻し它を患ふ，故に相ひ問ひて它無き乎と，凡そ它の屬は皆な它に从ふ，蛇，它或いは虫に从ふ，

（校）「𧈧」，大徐本「垂」に作る。

（一）「𧈧」各本「垂」に作る。今正す。「𧈧」なる者は「艸木の華葉𧈧るる」¹⁾也。引申して凡そ物下𧈧するの僞と爲す。「垂」なる者は「遠邊」²⁾，其の義に非ず。「冤曲」なる者は其の體。「垂尾」なる者は其の末。𧈧は其の臥す形に象る。故に尾を誦し而して短し。𧈧は其上冤曲し而して下尾を垂るるに象る。故に長し。尾を誦するは之れを「虫」と謂ひ，尾を垂るるは之れを「它」と謂ふ。「它」は「𧈧」と古音同じき也。³⁾『詩』に「維れ虺 維れ蛇は女子の祥」⁴⁾，呉語に「虺爲るときに摧かざれば，蛇と爲れば將に若何せん」と。「虺」は皆な「虫」の段借，皆な或いは臥し或いは尾を垂るるを謂ふ耳。臥する者は較や制し易く，尾を曳き而して行く者は制し難

1) 六篇下 5a 𧈧部「𧈧」字説解。段注に「引伸爲凡下𧈧之僞，今字𧈧行而𧈧廢矣」。

2) 十三篇下 39a 土部「垂」字説解。段注に「俗書邊垂字作陲，乃由用垂爲𧈧，不得不用陲爲垂矣，自部曰，陲，危也，則無邊義」。「陲」は十四篇下 12b。

3) 六篇下「𧈧」字段注に「是爲切，古音在十七部」。

4) 小雅・斯干。

し。故に「虺爲るとき摧かず、蛇と爲らば將に若何せん」と曰ふ也。託何の切、十七部。今人「蛇」は「它」と異義異音。蛇は食遮の切。



(二)「上古」なる者は神農以前を謂ふ也。「它無きを相ひ問ふ」は猶ほ後人の「恙へず」「恙無し」のごとき也。語言轉移すれば、則ち「別故無し」を以て之れに當つ。而して其の字或いは「佗」を段りて之れと爲す。又た俗に「他」に作る。經典多く「它」に作る。猶ほ「彼」と言ふがごとき也。許は此れを言ひて以て段借の例を説く。羔羊の傳に曰く「委蛇は行きて迹に従ふ可き也」と。⁵⁾ 亦た引申の義也。



(三)「它」篆は本と「虫」篆を以て引きて之れを長くする而已。^の乃ち又た「虫」左旁を加ふるは是れ俗字也。

文一 重一

(龜部)

9a

龜，舊也^(一)，外骨内肉者也^(二)，从它，龜頭與它頭同^(三)，天地之性，廣肩無雄，龜鼈之類，呂它爲雄^(四)，象足甲尾之形^(五)，凡龜之屬皆从龜，，古文龜^(六)，

龜，舊也，外骨内肉の者也，它に从ふ，龜頭は它頭と同じ，天地の性，廣肩にして雄無し，龜鼈の類は，它を呂て雄と爲す，，足甲尾の形に象る，凡そ龜の屬は皆な龜に从ふ，，古文の龜，


(校)「」，各本無し。

(一) 此れ疊韻を以て訓と爲す。「門は聞」⁶⁾、「戸は護」⁷⁾の例。龜，古音姫，亦た音鳩。^{キウ}「舊」は古音臼，亦た音忌。^{キウ}「舊」，本と「鳩」の舊字，段借して故舊と爲す，⁸⁾ 即ち久字也。劉向曰く「著の言は者，^キ龜の言は久，^キ龜千歳にして靈なり，著は百年にして神なり，其の長久なるを以ての故に能く吉凶を辨ず」と。⁹⁾『白虎通』¹⁰⁾ 語略は同じ。龜の大なる者を鼈と曰ふ。敖は久と音

5) 召南。「退食自公，委蛇委蛇」傳。

6) 十二篇上 7b 門部「門」説解。段注に「以疊韻爲訓」「莫奔切，十三部」。十二篇上 17b 耳部「聞，知聲也，从耳門聲」段注に「無分切，十二部」。門聲は古十七部諧聲表では十三部，莫奔切（魂韻）、無分切（文韻）は今韻古分十七部表では十三部。「聞」段注「十二部」は十三部の誤りか。

7) 十二篇上 6b 戸部「戸」説解。段注に「以疊韻爲訓」「侯古切，五部」。三篇上 17b 言部「護，救視也，从言夬聲」段注に「胡故切，五部」。

8) 四篇上 31a 雀部「舊，舊，舊也」，段注に「釋鳥，怪鳩，舍人曰，謂鴝也，南陽名鴝，一名忌欺，按今字爲新舊字」。

9) 『禮記』曲禮上「凡卜筮日」疏引く所。

10) 著龜篇に「龜之爲言久也，著之爲言著也，久長意也」。

相ひ近し。

(二) 「外骨」、考工記梓人の文。鄭「龜の屬」と云ふ。

(三) 此れ鼈頭は它頭と同じきが如し。魚尾は燕尾と同じ。兔頭は兔頭と同じ。兔足、鼈足、能足は鹿足と同じ。虎足は人足と同じ。兕頭は禽頭、离頭と同じ。皆な其の物の形相ひ似たり、故に字を製るに之れを同じくする也。此れ它に从ふの意を説く也。

(四) 『列子』に曰く「純雌は其の名大罽、純雄は其の名釋蜂」、張注して「大罽は龜髓の類也。釋は小也」と。¹¹⁾ 許「蠃」に注して亦た『列子』を稱す。¹²⁾ 按ずるに「它」を以て雄と爲せば、則ち其の子皆な它の子也。故に字「它」に从ふ。此れ「它」に从ふの又た一説也。

(五) 它に从ふ者は、它的頭に象る^{のみ}而已。左は足に象り、右は背甲に象る。「曳」なる者は尾に象る。居追の切、古音は一部に在り。讀みて基の如くす。¹³⁾ 音轉じて讀みて鳩の如くす。¹⁴⁾

(六) 象形にして它に从はず。

9b

鱗、龜名^(一)、从龜𠂔聲^(二)、𠂔、古文終字^(三)、

鱗、龜の名、龜に从ふ、𠂔の聲、𠂔、古文の終字、

(一) 當に「鱗龜也」三字句に作るべし。

(二) 徒冬の切、九部。

(三) 糸部に見ゆ。¹⁵⁾

鱗、龜甲邊也^(一)、从龜母聲^(二)、天子巨鱗尺有二寸^(三)、諸侯尺、大夫八寸、士六寸^(四)、

鱗、龜甲の邊也、龜に从ふ、母の聲、天子は巨鱗尺有二寸、諸侯は尺、大夫は八寸、士は六寸、

(一) 『公羊傳』に曰く「龜の青純」、何注して「純は緣也、緣甲鱗を謂ふ也、千歳の龜は青鱗、吉凶を明らかにする」也と。¹⁶⁾ 樂記¹⁷⁾、『史記』樂書¹⁸⁾ 皆な曰く「青黒緣は天子の寶龜也」と。

11) 天瑞篇。

12) 十三篇上虫部 48b 「蠃、蠃、蒲盧、細要土蠃也、天地之性、細要純雄無子、……」。

13) 古十七部諧聲表では龜聲は一部、今韻古分十七部表では居追切（脂韻）は十五部、基（之韻）は一部、鳩（尤韻）は三部。

14) 『廣韻』でも、上平六脂・龜（居追切）小韻だけでなく、下平十八尤・鳩（居求切）小韻にも見える。

15) 十三篇上 9b 「終、綵絲也、……、𠂔、古文終」。

16) 定公八年。阮元本は「青」下「鱗」を「髯」に、「乎」を「于」に作る。

17) 疏に「青黒緣者天子之寶龜也者、寶龜之中、並以青黒為之緣」、阮元校勘記に「寶龜之中並以青黒為之緣、閩、監、毛本同、衛氏集說亦作中、段玉裁中改甲、按公羊定八年傳龜青純、何休云、謂緣甲鱗也、緣在於甲、此中字作甲是也」。

18) 『史記』通行本は「寶」を「葆」に作る。集解に「公羊傳曰、龜青緣、何休曰、緣、甲鱗也、千歲之龜青鱗、明乎吉凶也」。

按ずるに「𪚩」なる者は「𪚩」の省。「𪚩」の段借字。劉淵林 蜀都の賦に注して譙周『異物志』を引きて曰く「涪陵に大龜多し。其の甲は以て卜す可し。其の縁は又（今の釵字）に中つ、瑇瑁に似たり。名づけて靈又と曰ふ」と。¹⁹⁾ 郭『爾雅』に注して亦た其の語を用ふ。²⁰⁾ 而るに今本譌字多し。「縁」なる者は甲の邊也。「甲」文は「木、孚甲を戴く象」に象る。²¹⁾ 故に介蟲の外骨は之れを甲と謂ふ。

(二) 汝閩の切、七部。

(三) 此れ以下『三正記』に出で、『白虎通』に見ゆ。²²⁾ 「天子」下、當に「龜」字有るべし。「巨」は當に「距」に作るべし。『漢』志に「元龜、距冉長尺二寸」, 「冉」は段借字也、孟康曰く「冉は龜甲の縁也、距は至也、背の兩邊緣を度るに尺二寸也」と。²³⁾ 按ずるに兩邊相ひ距ること尺二寸。故に元龜尺二寸は其の廣さを謂ひ、其の脩さを謂はざるを知る也。魯頌の毛傳に曰く「元龜は龜尺二寸」と。²⁴⁾

(四) 皆な兩邊相ひ距るを謂ふ。

文三 重一

(𪚩部)

10a

𪚩, 龜𪚩也^(一), 从它象形^(二), 龜頭與它頭同^(三), 凡龜之屬皆从龜, 𪚩, 𪚩, 籀文𪚩^(四), 𪚩, 龜𪚩也, 它に从ひて象形す, 龜頭は它頭と同じ, 凡そ龜の屬は皆な𪚩に从ふ, 𪚩, 籀文の𪚩, (一)『周禮』蝸氏「龜𪚩を去ることを掌る」, 鄭司農云く「蝸は蝦蟇也, 月令に曰く, 蝸蝸鳴くと, 龜𪚩は蝦蟇の屬, 書或いは蝦蟇を去ることを掌るに爲る」と。「玄謂く, 蝸は今の御に

19) 『文選』卷4。「龜龜水處」注。胡刻本は「又」を「又」に作る。胡『考異』に「注其縁中又, 案又當作又, 下靈又同, 見華陽國志涪陵郡下」。『華陽國志』卷1巴志・涪陵郡に「山有大龜, 其甲可卜, 其縁可作又, 世號靈義, 出涪陵縣郡治」。

20) 釋魚「二曰靈龜」注に「涪陵郡出大龜, 甲可以卜, 縁中文似蟾蜍, 俗呼為靈龜」。阮元校勘記に「涪陵郡……為靈龜, 雪牕本、注疏本同, 段玉裁云, 文當作又(ママ), 靈龜當作靈又(ママ), 又釵古今字, 依蜀都賦注、華陽國志訂正, 毒冒即龜之至大者, 其甲可為釵」。

21) 十四篇下19a 甲部「甲, 東方之孟, ……从木戴孚甲之象, ……」。

22) 『白虎通義』著龜篇「三正記曰, 天子龜長一尺二寸諸侯一尺大夫八寸士六寸龜陰故數偶也」。

23) 『漢書』食貨志。孟康説は顔注引く所。中華書局本は「冉」を「冉」に, 「距」を「距」に作る。

24) 泮水「元龜象齒」傳。阮元本は「龜」字を重ねず, 「元龜, 尺二寸」に作る。段玉裁『毛詩故訓傳』定本は「龜」字を重ね, 小箋に「補龜一字」という。

食する所の蛙也」²⁵⁾「齊魯の間は鼃を謂ひて蝮と爲す、鼃は耿鼃也、蝮と耿鼃と尤も怒鳴す。人の耳に聾しきが爲に、故に之れを去る」²⁶⁾と。按ずるに「蛙」は即ち「鼃」字。大鄭の説に依れば則ち「鼃」二字を一物と爲す。後鄭の説に依れば則ち「鼃」は即ち蝮、一物と爲し、「鼃」は乃ち耿鼃、一物と爲す。許に依れば「鼃」下に「鼃也」と曰ふ。大鄭の説に同じきが似し。然れども當に辯ずべき者有り。許果して二字を合して一物と爲さば則ち「鼃」篆下は當に「鼃、蝮也」と云ふべく、「鼃」下は「鼃也」と云へば、乃ち全書の例に合す。而して「蝮」「蝮」篆は虫部に居り。²⁷⁾此こは則ち「鼃」篆を單舉し釋して「蝮」と曰ふ。「鼃」篆下は則ち「鼃也」と曰ふ。是れ許の意は、鼃一物と爲し、蝮一物と爲す。²⁸⁾凡そ兩字名を爲し、一字他物と同じき者、他物と牽混する可からず。「鼃」は「鼃」に非ざるを知る也。許の「鼃」は即ち鄭の「耿鼃」。「鼃」は古音圭、^{ケイ}「耿」と雙聲。故に一字と爲すを得。彙評して「鼃」「耿鼃」と曰ひ、單評して「鼃」と曰ふ。『爾雅』に「鼃鼃は蟾蜍、水に在る者は鼃」と。²⁹⁾是れ則ち詹諸の類。而して水中に在るを以て別と爲す也。許鄭の「鼃」と單言するは、即ち『本艸』に所謂る「鼃、一名長股。陶云く「俗名土鴨、南人 蛤子と名づく、善く鳴く者」と。寇宗奭曰く「其の色青し。腹細く、後脚長し。善く躍る。其の聲を大にするを蛙と曰ひ、其の聲を小にするを蛤と曰ふ」と。³⁰⁾此れ「鼃」と「鼃」の別。皆な水中に在りて善く鳴く。故に『周禮』官を設けて之れを去る。鼃の段借は「鼃勉」³¹⁾爲り。

(二) 它に従ふは其の頭に象るを謂ふ。下は其の大腹に象る。莫杏の切。古音は十部に在り。³²⁾讀みて芒^{バウ}の如くす。

(三) 頭を言へば而ち餘は腹爲ること知る可し矣。鼃は本と尾無し。故に『風俗通』辯じて「蝮

25) 秋官・序官「蝮氏」注「鄭司農云、蝮讀爲蝮、蝮、蝮屬也、月令曰、蝮蝮鳴、故曰、掌去鼃、鼃、蝮屬、書或爲掌去蝮、玄謂蝮今御所食蛙也、字從蟲國聲也、蝮乃短狐與。阮元校勘記「蝮讀爲蝮、蝮蝮屬也、諸本同、按此當作蝮讀爲蝮、蝮、蝮屬也、故下引月令蝮蝮鳴證之、古文經當本作蝮氏、司農讀爲蝮、蓋蝮古文蝮今文、故夏小正周官作蝮、月令呂覽作蝮、釋文蝮氏古獲反、劉音或、劉昌宗本經當作蝮氏○按此當依漢讀攷」。『周禮漢讀考』は「蝮蝮」の「蝮」について「當作蝮」という。

26) 『周禮』秋官・蝮氏「掌去鼃、焚牡藟、以灰洒之則死」注。阮元本注に「故」字無し。

27) 十三篇上 57b「蝮、蝮也」58a「蝮、蝮也」。

28) 『周禮漢讀考』卷 5 蝮氏注の條では「司農謂鼃、蝮屬、至許叔重說文直云、鼃、蝮屬、是鼃與蝮屬不甚別矣、鄭君則顯別鼃與蝮屬爲二類、勝於鄭許者一也、司農、說文皆謂鼃一物、鄭君則知鼃與耿鼃爲二、此勝於鄭許者二也、……」といい、許説は鄭司農説と同じと考えていたようである。

29) 釋魚。阮元本は「蟾」を「諸」に作る。釋文は「蟾」を掲出し、「音諸、今作諸」と。

30) 『重修政和證類本草』卷 22 蟲部下品「鼃、……、一名長股、……、陶隱居云、……、俗名土鴨、其鳴甚壯、又一種黑色、南人名爲蛤子、食之至美、……、衍義曰、鼃、其色青、腹細、背尖、復脚長、故善躍、大其聲則曰蝮、小其聲則曰蛤、……」。寇宗奭は『本草衍義』の撰者。

31) 『毛詩』邶風・谷風「鼃勉同心」「鼃勉求之」、小雅・十月「鼃勉從事」大雅・雲漢「鼃勉畏去」などの例がある。

32) 鼃聲は古十七部諧聲表では十部に見えるが、莫杏切（梗韻）は今韻古分十七部表で十一部。

「蕤尾を掉りて肅肅たり」は乃ち「夏馬」の字の誤りと。³³⁾

(四) 古文は祇だ其の頭腹に象る。籀文は又た其の長足にして善く跳ぶに象る。

10b

蕤，蝦蟆屬^(一)，从黽圭聲^(二)，

鼃，蝦蟆の屬，黽に从ふ，圭の聲，

(校) 大徐本「屬」を「也」に作る。

(一) 「屬」，各本「也」に作る。今『韻會』九佳³⁴⁾ 據る所の小徐本に依りて正す。『廣韻』³⁵⁾ 同じ。「蝦蟆」は虫部に見ゆ。³⁶⁾ 蝦蟆は鼃諸と小しく別なり。鼃は則ち蝦蟆と大いに別，而して其の形は相ひ似たり。故に「屬」と言ひて而して別に見ゆ。『漢書』武帝紀「元鼎五年，鼃、蝦蟆鬪ふ」と。是れ其の別なるを知る可し矣。「鼃」なる者は『周禮』に所謂る「鼃」。今南人の所謂る水雞，亦た田雞と曰ふ。「鼃」「蛤」皆な其の鳴聲也。故に宋人の詩多く「吠蛤」と云ひ，³⁷⁾ 亦た「蛙聲閣閣」と云ふ。³⁸⁾

(二) 烏媧の切，古音は十六部。³⁹⁾ 按ずるに當に音乖^{クツイ}たるべし。字亦た「鼃」に作り，「蛙」に作る。

鼃，先鼃^(一)，詹諸也^(二)，其鳴詹諸^(三)，其皮鼃鼃^(四)，其行先无^(五)，从鼃无^(六)，无亦聲^(七)，
鼃，鼃或从酋^(八)，

鼃，先鼃，詹諸也，其の鳴は詹諸，其の皮は鼃鼃，其の行は先无，鼃无に从ふ，无亦た聲，鼃，
鼃或いは酋に从ふ，

(校) 大徐本、祁刻本，「鼃」下「无」上に「从(從)」字有り。

(一) 逗。疊韻。

33) 『藝文類聚』卷93 獸部上・馬「風俗通曰，……，又曰，蝦蟆一跳八尺，再丈六，從春至夏裸袒相逐，無他所作，掉尾肅肅，按蝦蟆無尾，當言夏馬，夏馬患蠅蚋，掉尾擊之，故肅肅也。『太平御覽』卷949 蟲多部六・蝦蟆「風俗通曰，蝦蟆善掉尾，俗說，蝦蟆一跳八尺，再跳丈六，從春至冬，袒裸相逐，無他所作，掉尾肅肅，謹按蝦蟆既處水中，其尾又短，正使掉之，豈能肅肅乎，原其所以，當言夏馬患蚋掉尾振擊常肅肅也，蝦蟆、夏馬音相似，……」。

34) 「蛙，烏媧切，……，說文蝦蟆屬，本作鼃，今文作蛙」。

35) 上平十三佳・蛙(烏媧切)小韻「蛙，蝦蟆屬，……，鼃，上同，又戸媧切」。

36) 注27参照。

37) 例えば蘇軾の宿餘杭法喜寺後綠野亭望吳興諸山懷孫莘老學士に「稻涼初吠蛤，柳老半書蟲」(『東坡詩集註』卷16)。

38) 例えば陸游『劍南詩稿』には，雨霽出遊書事「四鄰蛙聲已閣閣兩岸柳色爭青青」(卷1) 宿能仁寺「遙憐萍青青，厭聽鼃閣閣」(卷16) 雨霽「閣閣鼃何怒，翩翩蝶許忙」(卷71) などの例が見える。

39) 古十七部諧聲表で圭聲は十六部，今韻古分十七部表で烏媧切(佳韻)は十六部，乖(皆韻)は十五部。

- (二) 虫部に曰く「**蝮**は詹諸⁴⁰⁾也と。一物四名。「**蝮**」と曰ひ、「**尙**」と曰ひ、「詹諸」と曰ひ、「**𧈧**」と曰ふ。許は「詹諸」を主名として詳しく之れを釋す。
- (三) 蝦蟆は能く呷呷聲を作す。蟾蜍は聲を作す能はず。「詹諸」は其の饗吃^{センシヨ}の音に象る。此れ「詹諸」と名づくる所以を言ふ也。其の字俗に「**蟾**」に作り、又た「**蟾**」に作る。
- (四) 「**尙**」は猶ほ蹙蹙のごとき也。其の身大にして背黒く疥磊多し。此れ「**蝮**」、「**尙**」と名づくる所以を言ふ也。「**蝮**」の義は蓋し拳局に取る。
- (五) 「**尙**」は、足を舉げて前む能はざるの兒。蟾蜍跳ぶ能はず。菌尙、圓上は椎鈍にして鋭物に非ざる也。故に以て其の行に狀る。此れ「**尙**」と名づくる所以を言ふ也。
- (六) 會意。
- (七) 七宿の切、三部。
- (八) 酋聲、尙聲同じく三部に在り。

11a

- 𧈧**、**𧈧**^(一)、詹諸也、詩曰、得此**𧈧**^(二)、言其行**𧈧**^(三)、从𧈧爾聲^(四)、**𧈧**、**𧈧**、詹諸也、詩に曰く、此の**𧈧**を得たりと、其の行の**𧈧**たるを言ふ、𧈧に从ふ、爾の聲、
- (一) 逗。
- (二) 邶風 新臺の文。今詩「**戚施**」に作る。毛傳に曰く「**戚施**は仰ぐ能はざる者」、釋言に曰く「**戚施**は面柔也⁴¹⁾」と。
- (三) 此の五字當に「詩に曰く」の上に在るべし。小徐、糸自り卵部に至るまで今皆な傳はらず。攷うる可からず矣。「**𧈧**」は猶ほ**施**のごとき也。王風毛傳に曰く「**施**は進み難きの意」と⁴²⁾。此れ「**尙**」と名づくる所以を言ふ也。
- (四) 式支の切、古音は十六部十七部の間に在り。⁴³⁾

𧈧、甲蟲也^(一)、从𧈧𧈧聲^(二)、

𧈧、甲蟲也、𧈧に从ふ、𧈧の聲、

- (一) 考工記注に「外骨は龜の屬、内骨は**𧈧**の屬」と⁴⁴⁾。按ずるに𧈧の骨は龜と較べて稍や内なる耳。實は介の屬也。故に『周易』𧈧、蟹、贏、蚌、龜を一屬と爲す。⁴⁵⁾

40) 十三篇上 57b 「**蝮**」説解。

41) 新臺鄭箋同じ。『爾雅』釋言でなく釋訓。郭注に「**戚施**之疾不能仰、面柔之人常俯似之、亦以名云」。

42) 丘中有麻「將其來**施**」傳。

43) 爾聲は古十七部諧聲表では十五部、支韻は今韻古分十七部表では十六部。

44) 梓人注。

45) 説卦傳「離為火、……、為乾卦、為**𧈧**、為蟹、為贏、為蚌、為龜、……」。

(二) 并列の切，十五部。

鼈，大鼈也^(一)，从𧇧元聲^(二)，

鼈，大鼈也，𧇧に从ふ，元の聲，

(一) 今日驗するに鼈は鼈と同形，而して但だ大小の別を分つ。

(二) 愚袁の切，十四部。

11b

鼈，水蟲，侶蜥易，長丈所^(一)，皮可爲鼓^(二)，从𧇧單聲^(三)，

鼈，水蟲，蜥易に侶て，長さ丈所^{ばか}り，皮は鼓と爲す可し，𧇧に从ふ，單の聲，

(校) 大徐本、祁刻本「丈」を「大」に作り，「所」字無く，「皮可爲鼓」四字無し。

(一) 「所」字，『太平御覽』に依りて補ふ。⁴⁶⁾「丈所り」は猶ほ「丈許り」のごとき也。大雅靈臺の傳に曰く「鼈は魚の屬」。⁴⁷⁾馬部「驛」下に曰く「青驪にして白鱗あり，文は鼈魚の如し」と。⁴⁸⁾許は毛に依りて之れを鼈魚と謂ふ也。

(二) 四字本と魚部「鱣」⁴⁹⁾下に在り。古へ多く「鱣」を用ひて「鼈」と爲すに由りて淺人之れに注する也。今，此ここに移す。『詩』に「鼈鼓鼈鼈たり」⁵⁰⁾，『史記』に「靈鼈の鼓を樹つ」⁵¹⁾と。

(三) 徒何の切，古へ十四部に在り。唐干の切。⁵²⁾

鱣，水蟲也，葦貉之民食之^(一)，从𧇧奚聲^(二)，

鱣，水蟲也，葦貉の民は之を之れを食す，𧇧に从ふ，奚の聲，

(一) 蓋し猶ほ中國の食鼈のごとし，之れを水雞と謂ふ也。

46) 中華書局本(商務印書館影宋本縮印)『太平御覽』卷932鱗介部四・鼈引く『説文』は「長丈所」に作る。

47) 「鼈鼓逢逢」傳。

48) 十篇上18b。

49) 十一篇下24a「鱣，鱣魚也」段注に「各本此下有皮可爲鼓四字，由古以鼈皮冒鼓，鼈鱣皆从單聲，古書如呂覽等皆段鱣爲鼈，淺人胸讀古書，率尙妄增，不知字各有本義，許書但言本義，則此四字可増於鼈部，而不可贅於此也，今刪正」。

50) 大雅・靈臺。阮元本は「鼈」を「逢」に作る。釋文に「逢逢，薄紅反，和也，埤蒼云，鼓聲也，又作鼈，徐音豐」，黃焯『彙校』に「盧本同，案鼈爲鼈之誤，廣韻、集韻皆有鼈字云鼓聲」。『詩經小學』卷23逢逢「玉裁按廣雅，鼈鼈，聲也，……高誘呂氏春秋六月紀有始覽注引詩鼈鼓鼈鼈，衆經音義引郭璞山海經注詩云鼈鼓鼈鼈，是也，今山海經注無此句」。

51) 李斯傳、司馬相如傳・子虛賦。李斯傳集解に「鄭玄注月令云，鼈皮可以冒鼓」。

52) 古十七部諧聲表で單聲は十四部。今韻古分十七部表で徒何切(歌韻)は十七部，唐を干切(寒韻)は十四部。

（二）胡雞の切，十六部。

𧈧，𧈧屬，頭有兩角^(一)，出遼東，从𧈧句聲^(二)，

𧈧，𧈧の屬，頭に兩角有り，遼東に出づ，𧈧に从ふ，句の聲，

（一）頭に二角有るを以て𧈧に別つ也。蓋し亦た食す可し。

（二）其俱の切，古音は四部に在り。⁵³⁾ 讀みて鉤の如くす。『篇』⁵⁴⁾ 『韻』⁵⁵⁾ 皆な「𧈧」に作る。按ずるに吳都の賦に「龜龜」有り，劉注して「龜の屬也」「瑋瑋の如し」と。⁵⁶⁾ 此れ單名「𧈧」なる者と各物なり。

𧈧，營營青蠅^(一)，蟲之大腹者，从𧈧虫^(二)，

蠅，營營たる青蠅，蟲の大腹なる者，𧈧、虫に从ふ，

（校）大徐本、祁刻本、「𧈧」下「虫」上に「从（從）」字有り。

（一）小雅 青蠅の文。傳に曰く「營營は往來の兒」と。

（二）「虫」は猶ほ「蟲」のごとき也。此の蟲は大腹，故に其の字，𧈧、虫に从ひて會意す。腹大なること𧈧の如きの蟲を謂ふ也。其の音は則ち六部に在り。余陵の切。故に「繩」は「蠅の省の聲」と爲す。⁵⁷⁾ 許の精詣に非ざれば，則ち必ず^{みと}初めて形聲字と爲し，遂に古音をして攷ふ可かざらしむ矣。

𧈧，龜龜^(一)，龜蝻也^(二)，从𧈧^(三)，智省聲^(四)，𧈧，或从虫，

龜，龜蝻，龜蝻也，𧈧に从ふ，智の省の聲，𧈧，或いは虫に从ふ，

（校）大徐本、祁刻本「龜蝻」を「蝻」に作る。

（一）逗。雙聲。

（二）各本「蝻」字を奪す。今補ふ。「蝻蝻」は^{シュバウ}疊韻。⁵⁸⁾ 蝻部に曰く「^{サツ}蝻蝻は罔を作る蝻蝻也」⁵⁹⁾，

53) 古十七部諧聲表で句聲は四部。今韻古分十七部表で其俱切（虞韻）は五部，鉤（侯韻）は四部。

54) 『玉篇』𧈧部四百六「𧈧，其拘切，𧈧屬，又音鉤，𧈧，同上」。

55) 『廣韻』上平十虞・衢（其俱切）小韻「𧈧，𧈧屬，說文云，……，亦作𧈧，……」。

56) 『文選』卷5。劉涓林注。

57) 十三篇上 28b 糸部「繩，索也，从糸，蠅省聲」段注に「食陵切，蠅字入𧈧部者，謂其虫大腹如𧈧類也，故蠅以𧈧會意，不以𧈧形聲，繩爲蠅省聲，故同在古音弟六部，𧈧則古音如芒，在弟十部」。

58) 次頁「蝻」段注に「陟輪切，四部」。十三篇下 2a 「蝻」段注に「莫交切，古音謀在三部」。古十七部諧聲表では朱聲は四部，矛聲は三部，今韻古分十七部表では陟輪切（虞韻）は五部，莫交切（肴韻）は二部，謀（尤韻）は三部。

59) 十三篇下 2a 蝻部「蝻」說解。但し大徐本は「罔蝻」を「罔蛛」に作る。

(二) 蓋し楊雄『倉頡訓纂』⁶⁷⁾に見ゆ。『廣韻』亦た『倉頡篇』を引き「蟲の名」と云ふ。⁶⁸⁾按ずるに何の蟲爲るか、許亦た憐かならざる也。夏小正「匿の興」と言ふ⁶⁹⁾は、援きて以て匿鼃を證するを得ず。

(三) 此の「目て爲す」は乃ち段借の例を説く。杜林「鼃」を用ひて朝旦の字と爲す。蓋し杜林『倉頡故』⁷⁰⁾に見ゆ。攷うるに、屈原の賦に「甲の鼃、吾以て行く」、王逸曰く「鼃は旦也」と。⁷¹⁾『左傳』衛大夫「史朝」⁷²⁾、『風俗通』「史鼃の後」に作りて鼃姓と爲し⁷³⁾、『漢書』鼃姓又た「晁」に作る。⁷⁴⁾是れ古へ「鼃」を段りて朝と爲すは本と合はざる無し。許「是に非ず」と云ふは未だ審らかならず。他處亦た未だ此の例を見ざる也。木部「構」下「杜林以て椽桷の字と爲す」⁷⁵⁾、斗部「幹」下「杜林以て輶車の輪幹と爲す」⁷⁶⁾の若きは、亦た未だ其の是に非ざるを辯ぜず矣。蓋し段借の學は其の借字爲りて眞字に非ざるを明らかにし而して眞字存す。其の借字爲るを明らかにせず直だ指して眞字と爲し而して眞字借字の義皆廢れり矣。伯山⁷⁷⁾は蓋し鼃夕を謂ひて眞字と爲す。故に辯じて以て之れを防ぐ也。

(四) 蓋し亦た蟲の大腹なる者、故に瞋に从ふ。其の旦に从ふの意は詳かにする能はざる也。

(五) 「古文」、各本「篆文」に作る。今『玉篇』⁷⁸⁾に依りて正す。凡そ古籀を先にし篆を後にする者、皆な文勢に由りて尠せざるを得ず。此れ其の比に非ざる也。『廣韻』古本亦た必ず「鼃」を先にし「鼃」を後にし、注して「古文」と曰ふ。今本は二大字轉寫譌舛す。⁷⁹⁾『集韻』⁸⁰⁾、『類篇』⁸¹⁾

67) 『漢書』藝文志・六藝略・小學類に「揚雄蒼頡訓纂一篇」。

68) 『廣韻』下平四宵「鼃」、蒼頡篇云蟲名、亦姓、風俗通云、衛大夫史鼃之後、漢有鼃錯、……、晁、上同、鼃、古文。

69) 『大戴禮記』夏小正・五月。

70) 『漢書』藝文志・六藝略・小學類に「杜林蒼頡訓纂一篇」「杜林蒼頡故一篇」。

71) 『楚辭章句』卷4九章・哀郢。

72) 昭公七年傳。

73) 『廣韻』「鼃」條引く所。注67參照。

74) 通行本（中華書局本）では、景帝紀のみ「晁錯」に作るが、高帝紀、文帝紀、諸侯王表、百官公卿表、古今人表、食貨志、藝文志、五行志、鼃錯傳などその他はすべて「鼃錯」に作る。

75) 六篇上31a「蓋也、……、杜林目爲椽桷字」段注「杜林用構爲桷字、桷古音如穀、杜意構造字用構、椽桷字用構、蓋蒼頡訓纂一篇及蒼頡故一篇中語」。

76) 十四篇上33a「蠡柄也、……、楊雄、杜林說皆曰爲輶車輪幹也」段注に「漢志、楊雄倉頡訓纂一篇、杜林倉頡訓纂、倉頡故各一篇、輶車者小車也、小車之輪曰幹、亦取善轉運之意、亦本義之引申也」。

77) 杜林の字。

78) 瞋部四百六「鼃、中橋切、蝦鼃、蟲名、鼃、古文」。

79) 今本（澤存堂本）は「鼃」を掲出し、「鼃」を「古文」とする。注68參照。

80) 下平四宵「鼃、晁、馳遙切、說文、……、篆从目、或作晁、亦姓」。

81) 十三中「鼃、直遙切、匿鼃也、讀若朝、楊雄說、匿鼃蟲名、杜林以爲朝旦、非是、篆从目」。

大徐に依りて誤る。「𦉳」日部に見ゆ。讀みて窈エウの若くす。⁸²⁾ 古文，𦉳に从ふ，𦉳の聲。

文十三 重五

(卵部)

12b

卵，凡物無乳者卵生^(一)，象形^(二)，凡卵之屬皆从卵，𦉳，古文卵^(三)，

卵，凡そ物乳無き者は卵生，象形，凡そ卵の屬は皆な卵に从ふ，𦉳，古文の卵，

(校) 大徐本、祁刻本「𦉳古文卵」四字無し。

(一) 乞部に曰く「人及び鳥 子を生むを乳と曰ひ，獸は産と曰ふ」と。⁸³⁾ 此ここに云く「凡そ物の乳無き者は卵生」と。按ずるに此の「乳」字は乞部の「乳」字と義少しく異なる。此の「乳」は乳汁を謂ふ也。惟だ人及び四足の獸 之れ有り。故に其の子は胎生。羽蟲、鱗蟲、介蟲及び一切の昆蟲は皆な乳汁無し。其の子は卵生。故に「凡そ物の乳無き者は卵生」と曰ふ。然らば則ち何を以て「人及び鳥 子を生むを乳と曰ひ，獸は産と曰ふ」と言ふ。此の「乳」は猶ほ抱のごとき也，媪也。『方言』「北燕、朝鮮、洌水の間は伏雞を謂ひて抱と曰ふ。爵子及び雞雛は皆な之れを鷄と謂ふ。其の卵伏して未だ孕らず始めて化するは之れを涅と謂ふ」と。⁸⁴⁾ 鄭，樂記に注して曰く「體を以てするを媪と曰ふ」と。⁸⁵⁾ 惟だ鳥は卵に於いて之れに伏し之れを抱き，既に孕りて或いは生るれば之れを哺む。人の其の子を抱哺するに似たる有り。凡そ獸の恩勤は是に遜る。故に鳥の子を將やしなふを以て人と並言す。「乳」は實は乳汁の義の引申。許「乞」に泥みて鳥と爲す。故に「乳」を訓じて「人及び鳥」と曰ふ也。子部に曰く「𦉳は乳也」と。此れ乳汁の「乳」。「字」及び「孺」皆な曰く「子を乳はぐくむ也」と。⁸⁶⁾ 此れ乳哺の「乳」。此ここに「乳無き者は卵生」と云ふは，亦た指して乳汁を謂ふ也。

(二) 此れ上の「𦉳」の「象形」を冢りて之れを言ふ。卵未だ生れざれば則ち腹大なり。卵は陰陽合する所，天地の襍也，故に其の分合の形に象る。盧管の切。十四部。糸部「綰」下に云く「讀みて雞卵の若くす」と。⁸⁷⁾ 蓋し古へ卵は讀みて管の如くする也。

(三) 各本無し。今『五經文字』、『九經字樣』に依りて補ふ。『五經文字』に曰く「𦉳，古患の反，

82) 七篇上 8b 「𦉳，望遠合也，从日匕，匕，合也，讀若窈窕之窈」段注に「窈古讀如黝，音轉如杳，鳥皎切，二部」。

83) 十二篇上 1b 「乳」說解。

84) 卷 8。

85) 「羽者媪伏」注。阮元本は「以」字無し。『毛詩』小雅・小宛「螟蛉有子，蜾蠃負之」箋「蒲盧取桑蟲之子，負持而去，照媪養之，以成其子」疏引く樂記注は「以」字有り。

86) 十四篇下 25a 子部に「字，乳也」「𦉳，乳也」「孺，乳子也」。「字」の說解に「子」字は無い。

87) 十三篇上 14b。

詩の風に見え、字林見えず、又た古猛の反、周禮に見ゆ。説文以て古の卵字と爲す」と。⁸⁸⁾『九經字樣』に曰く、『説文』「𠂔」に作り、隸變「卵」に作ると。⁸⁹⁾是れ唐本『説文』此れ有ること疑ひ無し。但だ張引く『説文』の「古文の卵」は文字を刪去して未だ安からず。張の意は當に「卵卵、上説文、下隸變」と云ふべし。乃ち上字誤りて其の重文の古文を擧ぐ。是に非ず。然るに正しく以て唐時の『説文』の「𠂔」有るを證す可し。『汗簡』「𠂔」を以て古文の「卵」字と爲し、「𠂔」を古文の「風」と爲し「𠂔」を古文の「龜」と爲すと與に皆な本書に據る。⁹⁰⁾郭氏見る所の『説文』尙ほ完好也。「卵」の古音讀みて管の如くす。之れを引申して、内則「魚を濡るには卵醬」、鄭曰く「卵は讀みて鯤鯢と爲す、魚子也。或いは攔に作る」と。⁹¹⁾韋『國語』に注して亦た云く「鯢は魚子也」と。⁹²⁾内則の魚子は、其の未だ生まれざる者を言ひ、魯語の魚子は其の已に生まるる者を言ふ。其の意一也。又た之れを引申して『詩』「總角𠂔たり兮」⁹³⁾の「𠂔」と爲す。毛傳曰く「𠂔は幼穉也」と。此れ腹を出でて未だ久しからざるを謂ふ。故に仍ほ此の稱を得。魚の未だ生れざる、已に生まるるを皆な「鯢」と曰ふを得るが如き也。又た之れを引申して、『周禮』に「𠂔人」有り、鄭曰く「𠂔の言は礦也、金玉未だ器を成さざるを𠂔と曰ふ」と。⁹⁴⁾此れ金玉錫石の地中に樸韞され、而して精神外に見れ、卵の腹中に在るが如きを謂ふ也。凡そ漢注「之言」と云ふ者は皆な其の轉注段借の用を謂ふ。「礦」を以て「𠂔」を釋すは、未だ嘗て𠂔は古文の礦と曰はず、亦た未だ嘗て「𠂔」は讀みて「礦」と爲すと曰はざる也。其の雙聲自り以て其の義を得る而已。「𠂔」は固り讀みて管の如くし、讀みて關の如くする也。劉昌宗、徐仙民、侯猛、號猛反に讀み、即ち礦字と謂ふ⁹⁵⁾自り、遂に注の意を失す。而る後、妄人の敢へて『説文』「礦」篆の後ろに之れを益して「𠂔は古文礦」と曰ふ有り。⁹⁶⁾『周禮』に𠂔人有れば、則ち敢へて「卵」篆の後ろに於て徑ちに「𠂔は古文卵」を刪らざるを得ず。是れ猶ほ蘭臺の漆書を改めて以て其の私に合するがごとし。⁹⁷⁾其れ經を誣ひ許を誣ひ、天下を

88) 卷中・部。今本「卵」を「卵」に作る。

89) 雜辨部「𠂔卵、轡上、上説文下隸變」。

90) 『汗簡』下之二「𠂔、風」「𠂔、龜」「𠂔、卵（力管切）」。

91) 阮元本は「魚子」下に「也」字無し。

92) 魯語上「魚禁鯢鯢」注。

93) 齊風・甫田。阮元校勘記に「總角卵兮、小字本、相臺本同、閩本、明監本、毛本同、唐石經卵作𠂔、案各本皆誤、唐石經是也、見五經文字𠂔部」。

94) 地官・序官「𠂔人」注。阮元本は「曰𠂔」を「曰礦」に作る。釋文に「𠂔人、徐音礦、號猛反、劉侯猛反」「礦、音號猛反、金玉未成器」。

95) 『周禮』地官序官「𠂔人」釋文。上注參照。

96) 九篇下石部 23b「礦」說解。二徐本に「𠂔、古文礦、周禮有𠂔人」有り。段注本はこの九字を刪る。段注「今於卵部正之、於石部刪之」。

97) 『後漢書』宦者列傳・呂強傳「巡以為諸博士試甲乙科、爭弟高下、更相告言、至有行賂定蘭臺漆書經字、以合其私文者、……」。

率いて六書に味からしむ。當に析言破律、亂名改作の誅に膺るべからざらん哉。「𦍋」は卅の聲に从ひ、⁹⁸⁾「關」は𦍋の聲に从ふ。⁹⁹⁾許 形聲を説きて井井として條有ることはくの如し。

13b

𦍋, 卵不孚也^(一), 从卵段聲^(二),

𦍋, 卵孚らざる也, 从卵段聲,

(一) 爪部に曰く「孚」なる者は「卵即ち孚る也, 爪子に从ふ」と。¹⁰⁰⁾「孚らず」なる者は, 卵垢けて成らず。樂記に曰く「卵生する者は𦍋けず」, 鄭曰く「𦍋は裂也」と。今, 齊人の語に「𦍋」と云ふ者有り。按ずるに「𦍋」は即ち「𦍋」也。『呂氏春秋』に「雞卵多く𦍋す」と。¹⁰¹⁾『管子』五行篇「羽卵する者は段せず」¹⁰²⁾, 「段」を段りて之れと爲す。

(二) 徒玩の切。十四部。按ずるに當に讀みて𦍋の如くすべし。

文二 重一^(一)

(一) 二字今補ふ。

(二部)

14a

二, 地之數也^(一), 从耦一^(二), 弌, 古文二,

二, 地の數也, 一を耦するに从ふ, 凡そ二の屬は皆な二に从ふ, 弌, 古文の二,

(校) 大徐本、祁刻本「耦」を「偶」に作る。大徐本「一」字無し。

(一) 『易』に曰く「天一地二」と。¹⁰³⁾「惟れ初めは大始, 道は一に立つ」。¹⁰⁴⁾「一」有り而る後に「二」有り。「元氣初めて分れ, 輕き清易は天と爲り, 重き濁會は地と爲る」。¹⁰⁵⁾

(二) 「耦」各本「偶」に作るは誤り, 今正す。「偶」なる者は「桐人也」。¹⁰⁶⁾ 凡そ偶爾を云ふは

98) 十三篇上 40a 絲部「从絲省, 卅聲」段注「卅者𦍋字也, 鉉等云古礦字, 非也, 古還切, 十四部」。段注本は説解に「卅, 古文𦍋字」を補い「各本無此五字, 今補, 説詳𦍋部」と注する。

99) 十二篇上 13a 門部「關, ……」, 从門𦍋聲」段注「古還切, 十四部」。

100) 三篇下 13b 爪部「孚」説解。但し二徐本は「即」字無し。

101) 卷6 季夏紀・明理。畢沅の校語に「案説文𦍋, 卵不孚也, 徒玩切, 舊本作假, 訛, 今改正, 淮南原道訓、法言先知篇俱有𦍋字」。(浙江書局本に據る)

102) 房玄齡注「段謂離散不成」。

103) 繫辭上。

104) 一篇上 1a 「一」説解。但し, 二徐本は「大」を「太」に作り, 段注本は「始」を「極」に作る。

105) 十三篇下 16a 土部「地」説解。

106) 八篇上 37a 人部「偶」説解。段注に「按木偶之偶與二𦍋並耕之耦義迥別, 凡言人耦、射耦、嘉耦、怨耦皆取耦耕之意, 而無取桐人之意也, 今皆作偶則失古意矣, 又俗言偶然者, 當是俄字之聲誤」。

之れを用ふ。「耦」なる者は二人並び耕すの僦。¹⁰⁷⁾ 故に凡そ奇耦の字は之れを用ふ。古書或いは拘らず。許は必ず其の朔め^{はじ}に従ふ也。大徐本「一」字無きは非なり。「一を耦する」なる者は其の一を**兩**にする也。**兩**畫は當に均しく長かるべし。今人は上短く下長し。便ち是れ古文の「上」字。¹⁰⁸⁾ 「三」篆¹⁰⁹⁾ 亦た三畫均しく長し。而至の切、十五部。

亟，敏疾也^(一)，从人口又二，二，天地也^(二)，

亟，敏疾也，人口又二に从ふ，二，天地也，

(校) 大徐本，「口」上、「又」上、「二」上に「从」字有り。

(一) 支部に曰く「敏」なる者は「疾也」¹¹⁰⁾。「疾」¹¹¹⁾なる者は「本と其の字無し，聲に依りて事を託す」の字也。¹¹²⁾ 後人「捷」を以て之れに當つ。¹¹³⁾ 今人「亟」を入聲、去聲に分かつ。入の訓は「急也」。去の訓は「數也」。¹¹⁴⁾ 古へ是の分別無し。數は亦た急也。二義有るに非ず。『詩』「亟かに其れ屋に乗れ」，箋に云く「亟は急也」と。¹¹⁵⁾ 『詩』多く「棘」を段りて「亟」と爲す。「棘人樂樂たり」，傳に「棘は急也」と曰ふ¹¹⁶⁾ が如し。「我是を用て棘なり」¹¹⁷⁾ 「棘其の欲を棘する

107) 四篇下 53a 耒部「耦，耕廣五寸爲伐，二伐爲耦」段注に「耕各本作耒，今依太平御覽正，匠人，耜廣五寸，二耜爲耦，一耦之伐，廣尺深尺，謂之**𤄎**，注，古者耜一金兩人併發之，……，長沮、桀溺耦而耕，此兩人併發之證」。

108) 一篇上 2b 二部「二，高也，此古文上」。二徐本は「上」を古文とする。

109) 一篇上 17b 三部。

110) 三篇下 32b 「敏」説解。

111) 七篇下 26b 「疾，病也」段注に「按經傳多訓爲急也，速也，此引伸之義，如病之來多無期無迹也，止部曰，**𤄎**，疾也」。

112) 假借字。『說文解字』敘「假借者，本無其字，依聲託事，令長是也」。

113) 二篇上 40a 止部「**捷**，疾也」段注「凡便捷之字當用此，捷，獵也，非其義」。十二篇上 54b 手部「捷，獵也，軍獲得也」。

114) 『廣韻』去七志・亟(去吏切)小韻下に「數也，遽也」，入二十四職・**𤄎**(紀力切)小韻に「亟，急也，疾也，趣也」。

115) 幽風・七月。

116) 檜風・素冠。

117) 小雅・六月。阮元本は「棘」を「急」に作る。鄭箋に「王以是急遣我」。阮元校勘記に「案毛鄭詩考正云，急字於韻不合，段玉裁云，鹽鐵論引急作戒，謝靈運撰征賦用作棘，皆協，今作急者後人用其義改其字耳，詳詩經小學。『詩經小學』卷 17 我是用急「鹽鐵論引詩我是用戒，顧亭林云，當從之。戴先生曰，戒猶備也，治軍事爲備禦曰戒，譌作急，義似劣矣，急字於韻亦不合。玉裁按謝靈運撰征賦曰，宣王用棘於**獫狁**，是六朝時詩本有作我是用棘者，爾雅釋言曰，**械**，備急也，釋文曰，**械**，本或作**𤄎**(今本作極，譌)，又作亟，詩匪棘其欲，鄭箋棘急也，正義亦曰，棘急，釋言文，禮器引詩匪革其猶，鄭注革急也，正義曰，革急，釋言文，素冠詩毛傳棘急也，正義曰，棘急，釋言文，彼棘作**械**(今本作戒，譌)，音義同，然則**械****𤄎**亟棘革戒六字同音，義皆急也，此詩作棘，作戒，皆協，今本作急者，後人用其義改其字耳」。

に非ず¹¹⁸⁾、皆な同じ。『禮記』「其の猶を革するに匪ず」に作る。¹¹⁹⁾「革」は亦た「亟」の段借字也。釋言に曰く「械、急也」。亦た「恆」に作る。¹²⁰⁾皆な「亟」字の異なる者^{のみ}耳。

(二) 徐鍇曰く「天の時に乗り、地の利に因り、口もて之れを謀り、手もて之れを執れば、時失する可からず、疾也」と。¹²¹⁾玉裁謂く、天地の道は恆久にして已まず。¹²²⁾手病み口病み、¹²³⁾夙夜懈るに匪ず。¹²⁴⁾君子自ら強めて息まず。¹²⁵⁾人道の天地と與に參わる所以也。¹²⁶⁾故に人に从ひ、二に从ふ。紀力の切、又た去吏の切、一部。

14b

𠄎、常也^(一)、从心舟在二之間上下^(二)、心目舟施、恆也^(三)、𠄎、古文恆、从月^(四)、詩曰、如月之恆^(五)、

恆、常也、心舟、二の間に在りて上下するに从ふ、心は舟を目て施す、恆也、𠄎、古文の恆、月から从ふ、詩に曰く、月の恆るが如しと、

(校) 大徐本、「从心」下に「从」字有り。小徐本「上下」下に「一」字有り、「𠄎」を「𠄎」に作る。

(一) 「常」は當に「長」に作るべし。古へ長久の字祇だ「長」に作る。淺人稍稍分別し、乃ち或いは「下霤」の「常」¹²⁷⁾を借りて之れと爲す。故に『集韻』に至りて乃ち「一に曰く、久也」の訓有り。¹²⁸⁾而して『篇』¹²⁹⁾『韻』¹³⁰⁾皆な之れ無し。此れ俗字の正さざる可からざる者也。時の長きと尺寸の長きは二義有るに非ず。

(二) 「上下」は猶ほ往復のごとき也。

(三) 往復遙かに遠く、而して心は舟を以て運旋するを謂ふ。久しきを歴て變はらず。「恆」の

118) 大雅・文王有聲。阮元本は「非」を「匪」に作る。鄭箋に「棘、急」。釋文に「匪亟、居力反、下亟同、或作棘」。

119) 禮器「詩云、匪革其猶」、注に「革、急也、猶、道也」。

120) 釋文に「械、本或作極、又作亟、同、紀力反、或音戒」。

121) 祁刻本に據れば『通釋』は「乘」を「承」に作り、「執之」下に「時乎」二字有り。

122) 『周易』恆・象辭。

123) 幽風・鴟鵂「予手拮据、予所捋荼、予所蓄租、予口卒瘁」傳に「手病口病、故能免乎大鳥之難」。詩序に「鴟鵂、周公救亂也、成王未知周公之志、公乃為詩以遺王」。

124) 大雅・烝民、韓奕に見える。阮元本は「懈」を「解」に作る。

125) 『周易』乾の象辭に「君子以自強不息」。

126) 『禮記』經解に「天子者、與天地參」。

127) 七篇下 47a 巾部「常、下霤也」。

128) 下平十陽・常(辰羊切)小韻に「常裳、……、說文下霤也、或从衣、常、一曰、天子旗名、一曰、久也、又州名、亦姓」。

129) 『大廣益會玉篇』巾部第四百三十二「常、市羊切、恆也、下霤也、今作裳」。

130) 下平十陽・常(市羊切)小韻下に「倍尋曰常、又官名、……、釋名曰、九旂之名、……、亦姓、……」。

意也。「宙」下に曰く「舟車の極りて復る所也」と。¹³¹⁾ 此れ會意の指を説く。胡登の切。六部。俗本「心」上に一字を増すは、非。

(四) 此の篆、轉寫譌舛す。既に「月に従ふ」と云へば、則ち左は當に𠄎に作るべし。當に「夕」に作るべからざる也。『汗簡』の若きは則ち左は「舟」に作り、而して右は亦た此れに同じ。¹³²⁾ 曉る可からず。又た按ずるに門部の古文の「聞」は「聞」に作る。¹³³⁾ 蓋し古文の「月」字略ぼ「外」字に似る。古文の「恆」は直だ是れ「二」中の「月」耳。

(五) 小雅、天保の文。此れ月に従ふの意を説く。『毛詩』「𠄎」に作るを謂ふに非ざる也。傳に曰く「恆は弦」也と。按ずるに『詩』の「恆」、本亦た「𠄎」に作り¹³⁴⁾、弦を張るを謂ふ也。月上弦にして盈に就く。是に於て恆久の義有り。故に古文は「月」に従ふ。

𠄎、求回也^(一)、从二从回^(二)、回、古文回^(三)、象𠄎回之形^(四)、上下所求物也^(五)、

𠄎、回を求むる也、二に从ひ回に従ふ、回、古文の回、𠄎回するの形に象る、上下は求むる所の物也、

(校)「求回」、二徐本「求𠄎」に作る。小徐本、「回回」を「回」に作る。

(一)「回」、各本「𠄎」に作る。今正す。「回」を以て釋すは、雙聲を以て訓と爲す也。「回」なる者は「轉也」。¹³⁵⁾「𠄎」字、經典に見えず。『易』屯卦「槃桓」、¹³⁶⁾「槃」亦た「盤」に作り、亦た「槃」に作る。¹³⁶⁾義は當に「般」に作るべし。「桓」義は當に「𠄎」に作るべし。「般」なる者は辟也。「𠄎」なる者は回也。馬融云く「槃桓は旋也」。¹³⁷⁾是の二字皆な段借也。凡そ「舟の旋」は「般」と曰ひ、¹³⁸⁾「旌旗の指𠄎」は「旋」と曰ひ、¹³⁹⁾車の「運」は「轉」と曰ひ、¹⁴⁰⁾「𠄎柄」は「幹」と曰ふ。¹⁴¹⁾皆な其の意也。

(二) 會意。須縁の切。按ずるに古音は讀みて桓の如くす。十四部。¹⁴²⁾

131) 七篇下 15a 宀部「宙、舟輿所極覆也」。二徐本、段注本いずれも「車」を「輿」に作り、「復」を「覆」に作る。

132) 『汗簡』下之二「𠄎、恒、𠄎、上同、並說文」。

133) 十二篇上 12a 「聞」下に「聞、古文」。段注本は「聞」を「聞」に作る。

134) 釋文「之恆、本亦作𠄎、同、古鄧反、沈古桓反、弦也」

135) 六篇下 10b 口部「回、轉也、从口、中象回轉之形、回、古文」、段注に「戸恢切。十五部」。

136) 釋文「槃、本亦作盤、又作槃、步千反」。

137) 釋文「桓、馬云、槃桓、旋也」。

138) 八篇下 6a 舟部「般、辟也、象舟之旋、从舟从夂、夂、令舟旋者也」。

139) 七篇上 19b 𠄎部「旋、周旋、旌旗之指𠄎也」。

140) 十四篇上 52b 車部「轉、還也」。大徐本は「還」を「運」に作る。段注本は小徐本に同じ。

141) 十四篇上 33a 斗部「幹、蠹柄也」段注に「此蠹非蟲齧木中、乃本無其字依聲段借之字、見瓢字下、……」。七篇下 5a 𠄎部に「瓢、蠹也」。

142) 今韻古分十七部表では須縁切（仙韻）桓（桓韻）は十四部、古十七部諧聲表では𠄎聲は十四部。

(三) 口部に見ゆ。¹⁴³⁾

(四) 「囬回」は雙聲¹⁴⁴⁾、猶ほ回轉のごとき也。

(五) 「上下」は「二」を謂う。求むる所上に在れば、則ち轉じて上る。求むる所下に在れば、則ち轉じて下る。此れ「回」に従ひ「二」に従ふの意を説く。

15a

𦉳, 𦉳也^(一), 从二^(二), 竹聲^(三),

竺, 𦉳也, 二に従ふ, 竹の聲。

(校) 「𦉳(𦉳)」, 二徐本「厚」に作る。

(一) 「𦉳」, 各本「厚」に作る。今正す。許の意は, 厚薄の字は當に「𦉳」に作るべし, 山陵の「𦉳」は乃ち「𦉳」に作る。¹⁴⁵⁾之れを一にするを容さず。『爾雅』、毛傳皆な曰く「篤は厚也」と。¹⁴⁶⁾今、經典絶えて「竺」に作る者少なし。惟だ釋詁尙ほ其の舊を存す。段借の字行はれ而して眞字廢る矣。「篤, 馬行くこと鈍遲也」。¹⁴⁷⁾聲同じくして義略ほ相ひ近し。故に段借の字専ら行はる焉。

(二) 厚さを加ふるの意。

(三) 冬毒の切, 三部。

𦉳, 取摺而言也^(一), 从二, 二, 耦也^(二), 从弓, 弓, 古文及字^(三),

凡, 取摺して言ふ也, 二に従ふ, 二, 耦也, 弓に従ふ, 弓, 古文の及字,

(校) 大徐本, 「而言」二字無し。「耦」, 二徐「偶」に作る。小徐本「二二」下「其」字有り。大徐本「及」下「字」字無し。

(一) 「取」, 各本「最」に作る。「最」なる者は「犯して取る也」。¹⁴⁸⁾其の義に非ず。今正す。「取」

143) 注 135 参照。

144) 戸恢切は匣母, 須縁切は心母だが, 桓は匣母なので, 「囬」の音を桓とすれば「囬回」は雙聲になる。

145) 五篇下 29b 𦉳部に「𦉳, 厚也」段注に「厚當作竺, 上文曰竺, 𦉳也, 此曰𦉳, 篤也, 是爲轉注, 今字厚行而𦉳廢矣, 凡經典𦉳薄字皆作厚」「厚, 山陵之𦉳也」段注に「𦉳各本作厚, 今正, 山陵之厚, 故其字从厂, 今字凡𦉳薄字皆作此」。

146) 『爾雅』釋詁下「惇、宣、祐、篤、擊、仍、𦉳、埤、竺、腹, 厚也」。『毛詩』唐風・椒聊「彼其之子, 碩大且篤」傳, 大雅・大明「篤生武王」傳, 大雅・公劉「篤公劉」傳。

147) 十篇上 11b 馬部「篤, 馬行頓遲也」。二徐本、段注本いずれも「鈍」を「頓」に作る。段注に「馬行箸實而遲緩也, 古段借篤爲竺字, 以皆竹聲也, 二部曰, 竺, 厚也, 篤行而竺廢矣, …… 蓋篤字之代竺久矣」。

148) 七篇下 39a 目部「最」大徐本說解。小徐本說解は「犯取, 又曰會」, 徐鍇通釋に「犯而取也, 故軍功上曰最, 下曰殿」。段注本說解は「犯取也」段注に「鍇曰, 犯而取也, 按犯而取猶冢而前, 取之字訓積, 最之字訓犯取, 二字義殊而音亦殊, 顏氏家訓謂取爲古聚字, 手部撮字从最爲音義, 皆可證也, 今小徐本此下多又曰會三字, 係淺人增之, 韻會無之, 是也」。

なる者は「積む也」。才句の切。¹⁴⁹⁾「拊」なる者は「絜也」。¹⁵⁰⁾「絜」なる者は「束也。絜者、麻一耑。束之成一耑也。「取拊」なる者は總聚而絜束之也。「意は内にして言外なる」を「𠄎」と曰ふ。其の意は「取拊」、其の言は「凡」也。『春秋緜露』に曰く「凡と號して略し、目と名づけて詳かにす。目なる者は徧く其の事を辨ずる也。凡なる者は獨り其の大を擧ぐる也。鬼神を享する者の號は一に曰く祭と。祭の散名、春は祠と曰ひ、夏は祔と曰ひ、秋は嘗と曰ひ、冬は丞と曰ふ。禽獸を獵する者の號は一に曰く田と。田の散名は春苗、秋蒐、冬狩」と。¹⁵¹⁾按ずるに『周禮』多く凡を言ふ。「六典」は凡也。「治典」「教典」「禮典」「政典」「刑典」「事典」は目也。¹⁵²⁾鄭注「取目」と言ふ者は其の總數を謂ふ也。¹⁵³⁾その他「凡そ祭祀」、「凡そ賓客」、「凡そ禮事」、「凡そ邦の弔事」と言ひ、「師、官成を掌り以て凡を治む」と言ふが若きは、¹⁵⁴⁾亦た皆な聚拊の謂ひなり。其の凡を擧ぐれば則ち罔の綱に在るが若し。¹⁵⁵⁾杜預の『春秋』を説くに曰く「傳の義例。諸凡總歸」¹⁵⁶⁾と。凡の言は汜也。汜濫一切を包擧するの稱也。

(二)「耦」各本「偶」に作る。今正す。¹⁵⁷⁾一、二なる者は天地の大數也。故に二に从ふ。

(三)又部に見ゆ。「及は逮也」。¹⁵⁸⁾「及」に从ふ者は、束を拊るの意に取る。浮芝の切。古音は七部に在り。扶音の切に讀む。按ずるに篆體、右は古文の「及」の半に像て而して左は筆を引き下垂し、内は一に从ひ、二に从ふに非ざる也。説解と相ひ應ぜず。夫れ許は既に之れを二部に列し、「从二」と明言すれば、乖異是くの如きは互しからず。蓋し轉寫既に久しく譌奪の由、深思有る者尠し。許は篆を先にし古籀を後にするを以て經例と爲し、古籀を先にし篆を後にするを變例と爲す。變例の興るは部首に起こる。部首「二」と爲せば則ち「二」に从ふの「凡」は當に先に列すべく、「一」に从ふの「凡」は當に之れを後にすべし。其の文を攷定すれば、當に「𠄎、取拊して言ふ也、二に从ふ、二は耦也、𠄎に从ふ、𠄎は古文の及」に作るべし。

149) 七篇下 26a ㄅ部「取」説解。段注に「以許君訓積求之、積則必有其高處、今人最美、最惡之云、讀祖會切、蓋於形、於音皆失之、古必作取、讀才句切」。

150) 十二篇上 46a 手部「拊」字説解。段注に「拊爲凡物總會之偶」。

151) 深察名號篇。今本は「名目而詳」を「名詳而目」に作る。蘇輿『義證』に「疑作名目而詳、僖五年傳、一事而再見者、前目而後凡也、亦以凡、目對擧、……」。

152) 『周禮』天官・大宰「掌建邦之六典、……、一曰治典、……、二曰教典、……、三曰禮典、……、四曰政典、……、五曰刑典、……、六曰事典、……」。

153) 『周禮』天官・小宰「以官府之八成經邦治、……、六曰聽取予以書契、……」注「書契謂出予受入之凡要、凡簿書之最目、獄訟之要辭皆曰契」。

154) 「凡祭祀」、「凡賓客」は『周禮』に散見する。「凡禮事」、「凡邦之弔事」、「師掌官成以治凡」は『周禮』宰夫に見える。

155) 『尚書』盤庚上に「若網在綱、有條而不紊」。

156) 春秋左氏傳序。

157) 「二」字段注 (p.102) 參照。

158) 三篇下 18b 「及、……、𠄎、亦古文及」段注「按凡字從此」。

此の下又た「𠄎，篆文の𠄎」と云ふ。李斯 古文を省改し，漢人之れを行ふ。故に許の立文必ず是くの如し。妄人知らず。一移一奪は乃ち倉頡造る所を使って千古放佚せしめ，許君の凡例は艸莽に委てらる矣。○江沅曰く，右旁く作るは乃ち古文「及」の省也。尸は乃ち二の形。而して上筆を以て引き長くして右に配する也。當に「古文の「及」の省に从ふ」と云ふべし。則ち之を得矣。

文六 重二^(一)

(一) 按ずるに「凡」は古文有り小篆有れば，則ち當に「重三」なるべし。

使用テキスト

『説文解字注』

嘉慶二十年經韻樓本影印（上海古籍出版社，1981年）

必要に応じて，下の版本を参照

嘉慶二十年經韻樓本影印（藝文印書館，1981年）

皇清經解本

同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

阮元本影印（藝文印書館，1989年）

『經典釋文』

通志堂本

必要に応じて北京図書館藏宋刻宋元遞修本を参照。

本稿は JSPS 科研費 JP25K03885 の助成を受けたものである。